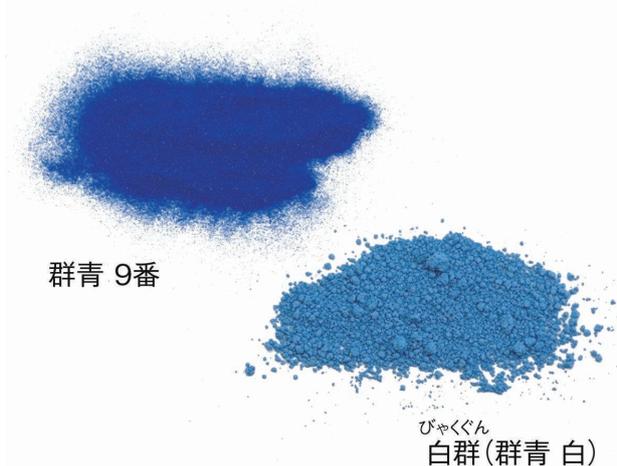




岩絵具

いわえのぐ



群青 9番

びやくん
白群(群青 白)

天然岩絵具(原石と絵具)



くじゃくいし
孔雀石(マラカイト)



ろくしょう
緑青



らんどうこう
藍銅鉱(アズライト)



ぐんじょう
群青



金茶石(虎石)



きんちゃ
金茶



辰砂



しんしゃ
辰砂

概要

岩絵具は、主に鉱石を砕いてつくられた粒子状の日本画絵具です。粒子は砂のように粗く、艶のないマットな質感が特徴です。絵具そのものに接着性はなく、膠液（にかわえき）と加えることにより支持体に接着します。岩絵具には、天然鉱物でつくられた「天然岩絵具（てんねんいわえのぐ）」、近代に入り人工的につくられた「新岩絵具（しんいわえのぐ）」「合成岩絵具（ごうせいいわえのぐ）」があります。

天然岩絵具は、天然の鉱石を砕いてつくられた岩絵具です。希少で色数が少なく高価ですが、膠液となじみやすく、天然ものは独特の深みのある色ができます。また、焼いて炭化することで暗色を作り色数を増やせます。新岩絵具は、ガラスに金属酸化物を加えて化学的にできた人工石を砕いた絵具です。色数が豊富で、変色せず、耐久性に優れています。

合成岩絵具は、水晶末や方解末を染料で特殊着色してつくられた岩絵具です。明るい色調の絵具で、中間色や蛍光色があります。

粒子の大きさを1番から13番ぐらいまでの番号で表し、番号が小さいほど粒子が大きく、番号が大きいくほど粒子が小さくなります。その中で最も微粒子のものを「白（びやく）」と言います。これは、粒子が小さい程、色が淡く白っぽくなることからそう呼ばれています。

絵具の製造は、粒子の重さによって水中での沈殿速度に差があることを利用した「水簸（すいひ）」という作業で粒子分けされます。

岩絵具の粒子は、画面の下地が透けやすいので、重色（一度塗って乾いたらまた塗り重ねる）により、粒子の隙間を埋めて、重ねた色の違いで深みのある色調を表現できます。混色（塗る前に絵皿の中で色を混ぜ合わせる）は、粒子の大きさの違いで均一には混ざりにくいですが、まだらな色調の表現を楽しむことができます。

岩絵具を溶くには、一粒一粒を膠液でくるむように丁寧に練ります。膠液より先に、水に濡らしてしまうと接着力が弱くなるので注意しましょう。描き方によって適量に水を加えます。一般的には、筆で絵具をすくって画面に置くように描きます。使い切れなかった岩絵具は「膠

抜き（にかわぬき）」という湯をそそぎ絵具の膠を抜く作業をして保管できます。

岩絵具は、種別（天然、新、合成）、名称、番号が明記され、「一両目（15グラム）」という単位で販売しています。日本画の材料を取り扱う画材店で購入できます。

新岩絵具(原料と絵具)



人工鉱石



合成岩絵具(原料と絵具)



粒子と色調

群青13番 11番 9番 7番 5番 3番

粒子標識準番号

白	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
極細	細	中	荒	特荒									

番号はひとつの基準で、絵具店や製造者によって誤差があります。

岩絵具を溶く



手順1. 適量の岩絵具を絵皿に取り、膠水を少しずつ加えます。

膠抜き



手順1. 絵皿のうわずみを捨てて、熱湯を注ぎます。



手順2. 中指の腹を使ってよく練ります。粒子の粗い絵具は膠水を多めに入れます。



手順2. 少し冷ました後、指で混ぜます。



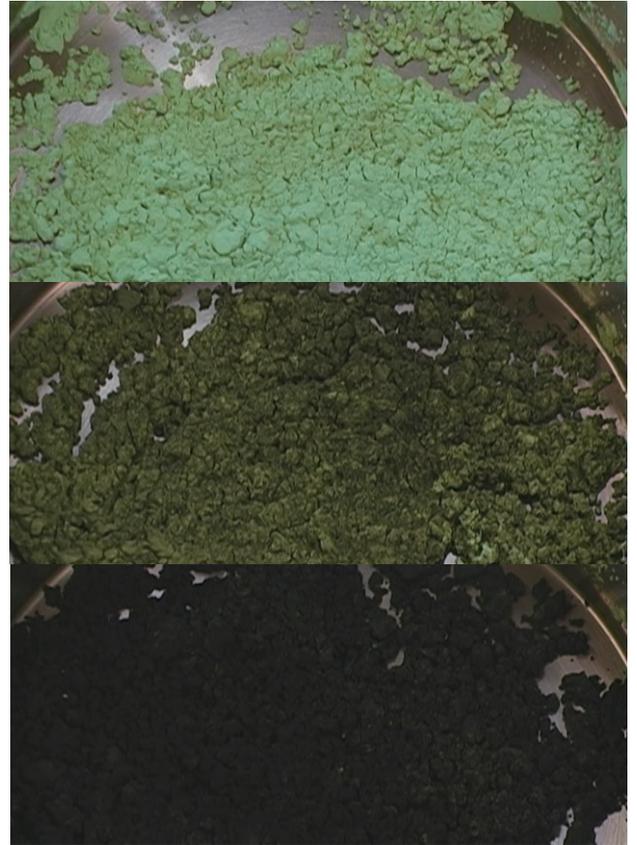
手順3. 練り終えたら、少しずつ水を加えて溶きのばします。



手順3. 置いて絵具が沈殿したら、うわずみを捨てます。



手順4. 手順2と3を数回くり返した後、自然乾燥します。絵皿に入った状態のまま保管します。



手順2. 色の変化に注意して、求める色になれば焼くのを止めます。

天然岩絵具を焼く



手順1. 小さなフライパンまたはアルミ製のお玉に天然岩絵具を入れて、電熱器またはコンロで焼きます。ムラにならないように、時々葉さじで掻き混ぜます。